

JTA通信 第10号

全体性と非専門性

2025年10月25日

分業、余剰、非専門領域

貨幣と余剰のエネルギー

少し前に見たマツコ・デラックスと関ジャニ∞改め SUPER EIGHT の村上信五の『月曜から夜更かし』という番組で、ホストクラブに密着していた。

シャンパンタワーを作る専門の職人がいて、彼は「歌舞伎町は苦手なので早く帰りたい」と言っていた、さらにコール専門の10人ほどのグループもいて、そのリーダーは「シャンパンタワーは高額なので、コールもプロがやるのがいい」と言っていた。これを見て思ったのは、ホストクラブという系でもこれだけ分業されているのだということ。

最近、「分業」が気になっていて、この概念はおそらくアダム・スミスが最初に取り上げたのだと思うが、より経済的でより効率的に物事を進めるには分業にして、それぞれが自分のパートだけをひたすらやり続けるのが一番いい。ヨーロッパの高級テーラーの界隈ではズボンだけ作る人やシャツだけ作る人などに分かれているという話を聞いたことがある。

この辺りは貨幣の流通と大きく関係している。もともとは共同体内でそれぞれができることをして、そこで得られたものの交換や分け合いによって生活を成り立たせてきたが、貨幣が流通していけば物々交換によって必要なものを手に入れる必要はなく、貨幣を持っておけばそれで必要なものと交換できる。

じゃあどうやって貨幣を手に入れるのかと言えば、それはその人の余剰の一部との交換によってである。アスリートは運動能力を、作家は言葉を、ミュージシャンはメロディーを貨幣と交換する。

いかに余剰を作り出せるかが問題になってくる、となればこれは一つのことをひたすらやりまくるのが合理的ということになる。一つのことを専門として取り組み、それによる余剰を貨幣と交換してその貨幣で生活に必要な物資を集めていく。

そういえば、夏目漱石も『職業と道楽』の中でそんな話をしていた。彼は「余剰」というよりも、「人のためにしたことによってお金が手に入りそれで物を買うのだから、人のためにやったことの量＝自分のためになることの量」という言い方だった。

規模が小さい時は過去にさかのぼる

少し話は変わるが、『経済の流れと仕組みで分かる人類1万年史』という本で、トースターを0から作った男の話が紹介されていた。気になったので検索してみると、フリーライターの「トースターを分解して、そのパーツからすべて作ってみる企画」で、ざっくりまとめるとこういう感じ。

「トースターを実際に分解してみると400のパーツがあり、鉄鉱山など世界各地を飛び回って原材料を集め、昔の冶金学の知見も活用しながら何とか完成したものの、電源部分の電圧調整がうまくいかなかったので電源入れて5秒で速攻溶け出してしまいました」

ここに出てきた、「規模が小さい時は過去にさかのぼる必要がある」という言葉が面白い。現代ではこういった細かいパーツは全部工場で大規模に生産されているが、もとはと言えば人が少しずつ改良を重ねて機械で効率的に行えるようにしたのだから、初期の地点まで戻れば少数の人で作っていたところにたどり着く。ライターを作れないなら、木をこすり合わせて何とか頑張っていた時代まで戻れば火のつけ方が分かる。

逆に「過去の技術や知見まで遡っていけば、多くのことには個人で対応できる可能性がある」とも言える。それをやらなくてもいいために科学技術は発展してきたのだから、手間も暇もコストもかかることは間違いないだろうが、でも小さな規模でやってみるなら手に負えるところまで遡ればいい。

大学時代に論文を読もうとしたが難しく、その時に「はじめに」で紹介されている文献だけを辿って行ったのを今思い出した。それも似た話で、それが誰のどの論文を発展させたものなのか分かればそこに戻ればいい、それでもわからなければまた戻ればいい。するとどこかで、今では当たり前前に教科書に書かれている部分が出てくる。

話を戻すと、そんな意味で「小規模の時は過去にさかのぼる」と書かれていたのだと思うが、専門化によって分業化される流れは、「大規模に効率的に生産したい」という動機から生まれてくるもので、個人にとってもそれによって効率的に貨幣を集められる方が生活を成り立たせるのに都合がいい。

一方で、コミュニケーションの必要性はなくなっていく。お金と商品は機械的に交換可能で、会話を挟む必要はない。逆に考えれば、お金を使わない方向に時間の流れを巻き戻すと人とのやり取りが増えてくる。「人とのやり取りを増やしていけば、お金が関係しない方向に進んでいく」とも言える。

分業によって失われるもの

この分業化・専門化は全体性の喪失につながる可能性がある。ちょっと前に幻冬舎の編集者の箕輪氏が

「今は工場でねじを作っているけど、それが何にどう使われてるか分からないままの人が増えている。自分が作ったものが消費者にどう届いてるか想像できず、その行為に喜びを感じられない、だからSNSで人を攻撃するようになる」

みたいな話をしていたと、ニューヨークの屋敷氏が自身のYouTubeのチャンネルで取り上げたことが切り取られ、「ねじ職人をバカにしてるのか！」みたいに炎上した。

でもそこで働いている人が無条件にそうだと言ってるのではなく、「ねじとか工場とか関係なく、自分がやっていることが誰にどう届いてどう受け取られているのか分からないままやっているから、その行為に喜びを見出せない人が多くなっている」という話である。思考停止で目の前の与えられたことを淡々とやるだけではそこに嬉しさはないよね、というだけの話。

で、これがまさに全体性の喪失で、分業や専門化がもたらしたものであるように思う。専門領域だけにひたすら取り掛かることで効率的に余剰を作り出し、その余剰を貨幣と交換することで、生活に必要な物資の引換券を獲得する。

この結果、共同体での贈与や分け合いから外れて、個人単体でも生活を成り立たせることができるようになった。それは生活に最低限必要な環境、寝床や衣服や体を動かすエネルギーとなるカロリーなどを満たすことができる一方で、そのサイクルで回っている間の感情的な部分は取りこぼしているのかもしれない。

そもそもの箕輪氏の指摘は、分業的生活サイクルの中で取りこぼした喜びを得る行為として、人への攻撃が行われているのではないかということだった。実際どうか分からないがここで掘り下げたかったことではなくて、つまりポイントは、

分業によって、本来人間の中で全体としてくっついていないといけないはずのものが分解され、ある側面だけが生活の軸に置かれるようになっていくということ。

だから生活は成り立っていても失われていくものがあり、その一つは「自分が日々生み出しているものがどのように届けられ受け取られ使われているかが見えないこと」で、「その行為に喜びを感じられない」こと、

これがさっきから言及している炎上周りの核の部分だが、それ以外にも損なわれているものがあり、それは特定の何かと言うよりも、それらをすべてひっくるめたものとして「全体で捉えるという感覚そのもの」なのではないかと思う。

全体性と意味の喪失

自分が今やっていること知っていることは、全体の中の一部でしかないという感覚。全体が全体として統合されていて初めて健康に過ごせたり、人間本来の力を発揮できるという感覚。そういう意味で全体で物事を見る感性が重要でだからこそ、専門化・分業化の過程を逆にたどりながら全体がそこにあった時代や人に触れていく。

あとこの専門化は、「それが貨幣の獲得につながらなければやる価値がない」という勘違いを生む、非専門性の排除。元々はそれによって効率的に貨幣を獲得しそれを使って生活していくために専門化されていった、一方で、効果的に余剰を生み出せない、もしくは貨幣との交換の可能性がない活動は合理的でないとして排除される。これは他者よりも本人による部分が大きい。

これも全体が見えなくなることに関係していて、専門化や効率化はカロリー摂取とか安全な暮らせる場所の確保などの、マズローの欲求階層説で言うところの下層付近を満たすための過程であって、そのサイクルの中で上位部分まで満たすのは通常、容易ではない。

だからこそ現代では自己実現欲求などが強まっていて、専門化による貨幣の獲得やその生活のリズムの中では回収されない。仕事は生活を整える物資やサービスとの引換券を機械的に獲得する時間で、趣味や娯楽や遊びの中で感じられる喜びとは分離した状態。

それらは今挙げたように非専門的に行われるはずなのだが、全体性の喪失のよって、専門的に取り組んでお金を得ることがすべての様に思われてしまい、全体性を回復できるはずの非専門的活動の動機を見えなくさせる。というよりももっと強く、「やる必要がない、やるべきではない」ぐらいに思ってしまう。

宮沢賢治が『農民芸術要綱概論』の中で、「昔は楽しそうに働いていたが、今はつらく苦しい労働になっている」と嘆いていたのもこういったことから来ているのだと思う。彼は芸術の力で乗り越えていこうとしたが、このときの芸術こそが専門領域から外れたところにあるもので、これを専門的に取り組んでも期待する効果は得られない。

哲学者の鶴見俊輔はこの農民芸術などを取り上げて、非専門家による芸術であるところの「限界芸術」を提唱した。これから重要になってくるのは、全体感覚を取り戻していくことと、非専門領域を充実させることである。

また、この全体性の喪失は意味の喪失として読み替えられる部分がある。例えば7、8家族で暮らす村で各々に担当があつて、魚釣り、山菜採集、調理、道具作りなどをするのだとすれば、今自分がやっていることの結果が誰にどういう形で使われるのか、喜ばれるのか、簡単に想像できる。

本来どんな仕事でもこうなっているのが理想だが、現代の働き方では生産と消費/利用の距離が物理的にも心理的にも離れていて、そこから喜びを感じることは難しい。だからその部分を趣味や創作などの非専門的取り組みによって回復していく。

工場でも働いていても、仕事工程の背景や起源や社会における位置づけなどを勉強し、他とのつながりや使われ方を想像することもできるが、となるとその掘り下げや想像自体が嬉しい仕事であるのが望ましいということになってくる。

だから2つの考え方があり、仕事を専門化によって効率的に貨幣を集める行為と割り切って、他で非専門領域を膨らませるのか、仕事の中で全体を俯瞰しそこで喜びを感じられるようにしていくのか。

本人の興味に周りは追いつかない

それぞれが好きだったり興味があつたりして日々深く潜りこむようにやってる物事は、周りにはそう簡単に伝わらない。好きであるほど一人でやっただけで十分で、わざわざ周りに話して分かってもらおうともしないかもしれない。

情報には階層性というかランクがあつて、上の方ほど本質的で抽象的であるとすると、それらは簡単に人には伝わらない。ここを共感できる機会は少なくなっていく、日々大事にしていきたいまたはしている価値観が合致する人にはなかなか出会わないように。

今年に入ってから増えた記事のタイプ

真っ先に書きたかったことのための前振りとか導入的なものを描こうとしたが逆に分かりづらくなりそうなので、ここでいきなり本題を放り出してみると、去年ぐらいまではブログではあまり本質的過ぎるといふか抽象的で、使いどころやおもしろみが伝わりづらいように思える話はあまり積極的にしていなかった。

そういったものは割と避けていて、たまに配信してみてもそれほど印象的な反応はなかったりしたのだが、最近ちょっと風向きが変わっていて、そういった記事がちょこちょこ見られるようになっている。

ここまで具体的な記事の話をせずにきたが、例えば今ぱっと思いつくところでは、「腸と脳の関係」について書いたのとか「1/fゆらぎ」の話をしてる記事で、これらは初めの方にはブログには書かないようにしていたタイプの記事。

いきなり脳と腸の関係が重要とか面白いと言い始めても、何となくは想像できるにしても、身体感覚レベルではっきり腑に落ちるまでには大抵、かなりの距離がある。1/fゆらぎについてはレポートの形で配信したものをブログの記事にした。

こういうものは思い付きというよりも、その時気になってる感覚やテーマをしばらく調べていたら、たまたまいい感じにまとまりそうだと思って書く。

ゆらぎや脳腸相関が僕たちとどう関係があるのか整えていくが、僕は書き始めるまでに大量にそれまわりの情報を摂取していて、その一部を「内臓感覚」とか「1/fゆらぎ」みたいにある程度キャッチーでコンセプトチュアルな側面に絞って切り取る。

だからその過程で失われる情報はもちろん結構あって、というか「これらと人間の生活や人生や今日の毎秒の意思決定がどう絡んでくるか」は、そのテーマ自体を語るのでは不十分で、つまり、

「1/fゆらぎがなぜ重要になってくる気がしたのか」は、ゆらぎ側を掘り下げるだけでは不十分で、それは掘り下げる側の「それまで生きてきた文脈」があってこそ。

ブログで言えば、そういったことはあらかじめ「プロフィール」とか「ブログの趣旨」みたいな形に書かれていて、でもそこに書かれていないことはもちろんいくらでもある。そういった、それまでそいつの中に蓄積してきた情報や感覚が無意識に1/fゆらぎに反応するものなので、だから本人の最先端が周囲とぴったり足並みがそろうことはない。

全員が自分の興味やエネルギーの源泉や刺激を大いに受ける箇所に沿って一人で進んでいて、客観的に見れば同じ名前が付くような、例えば野球というカテゴリーであったとしても、一人一人がその内側で感じていたり参加しているレースは誰一人同じではない。

これまで生きてくる中でそのことは忘れ、学校の定期テストとか通知表とか資格試験の合否とか、なんかいくつかの集団で同じレースをやってるように勘違いしてしまってるが、全くそんなことはなくて全員が自分の人生で参加すると決めたレースで一人独走していればいい。

というかそういう風になっているのだから、そういう意味でも本人の最先端に周りが追い付くことはなくて、でもその中で似たレースがあつたり途中まで道が重なったりすることは大いにあって、そんなときに先を走ってる人がどんな装備を身につけてるのかは参考になる。レースが違っていても、近い地域で、近い気温で、近い湿度で走ってる人の装備や道具は見ておきたい。

どうせ気にされないとわかった上で

また変な方向に話が行ってしまったのでちょっと戻すと、さっき上げた「脳腸相関」とか「1/fゆらぎ」みたいな理屈が先行していて、自分との関係が見えづらいタイプの記事はあまり書いてこなかったのだが、途中からそういったことは無視するようになった。

それは何か月か何年後かにそれらが興味の範疇に入ってくる人が現れ始めるからで、といってもここまでの話はずっと意識として思ってたわけではなく、最近そういった記事が見られるようになってきたことに気づいて、やっぱり「個人的な問題意識に対するアプローチや回答に他の誰かが反応するまでにはラグがある」のだと改めて思ったから、後付けとしてそういう記事を出していくようにした理由として仕立て上げたということである。

とにかく、どうせしばらくの間は本人の最先端は気にされないのだから、気にされないと最初から受け入れたうえでいっぱい喋っておく、書いておく。「好きなことは好きだけ喋っておく」みたいな話でも何度か扱っている気がするが、好きなことを好きなだけ喋れることには力があって、これもいろんな角度から考えられるけど、好きなことを隠して無味無臭みたいにしてても自分も相手もあんまり面白くないというか、あんまりと言ったが本当は全然面白くない。

で、そうはいつでも好きなこと喋ってもどうせ伝わらないから、、、というのもあるかもしれないがそれでも喋っておく、するとそういうのが好きなやつってことになり、別に変なやつになりかけても変っておもしろいってことなのでそれでよくて、

もっと言えば、適当に自分の興味や好きなことのフィルターを通して喋っていると、意外と周りの人のエネルギーの源泉と接続することが出てくる。そうなると一番面白くて、お互いの根源的なことが交わる場になり時間になり、それが個人の核が外に開かれていく瞬間で、そのレベルでのつながりを広げていく、そうなったときに孤独じゃなくなる、個人に閉じていたはずの自分だけの興味関心探求心が、実は他の誰かの根幹と通じていたと知る。

エネルギーの源泉でつながる

保育士の友達が園内の研修で、「子供が絵を描いて見せてきたときに行ってはいけない言葉として、例えば『これは何を書いたの?』」などがあり、それはこのセリフによって子供に、『何であるかが分かっているものを書かなければならない』と思わせてしまうからで、もっと言えば、枠に収まるように色を塗らないといけないと植え付けることになりかねないから、塗り絵も本当はよくない」と言われたと話していて、それを聞いた時に僕はこれまでさんざん考えてきたテーマと通ずるものがあると気づく。

一つ挙げるとすれば「好きなものに名前はない」ということで、僕は卒園式で「大きくなったら消防士になりたいです」と言った気がするが、本来は別に固有名詞のある職業じゃなくてもいいわけで、将来そうなる大人は「既存の職業をベースに考えるものである」という思い込みを強めてしまう。

でもいかにその枠を取っ払って外に出るか、自分の内側で流れているものに気づけるか、そういうことを考えたかったわけで、これらが普段そんな話には一切ならない、保育士として毎日園児と向き合って仕事してる彼女が大事にしようとしているものと重なっていたりする。

というわけで「好きな感じ」に気付いていくこと、その「好きな感じ」をはっきり好きと外に出すこと、その「好きな感じ」で人と関わり社会に滑り込んでいくこと、これらは全部可能でありそこを攻めていくから面白い。

「天然で真理が分かる人」の天然性の正体

眉村ちあきの話をしてみよう。外部からの刺激をなくす。外圧がなくなれば、内側からの圧力が出てくる。それをエネルギーなのか思考なのかなんでもいいが、でも確実に勝手に自分との対話が始まっていく、その流れが生まれればあとはそれを書いていけばいい。

去年南米にいたときはwifiがまともに使えなくて、契約していても街中で使えなかったり、ジャングルはもちろん、宿でも劇的に弱かったりして不便だったのだが、そうすると暇すぎるので黙って考え事をするしかない。

ノートとペンは持って行ってたので適当に考えたことを書いていく、そうすると普段なら調べものしたり検索したりするタイミングでも、ネットを使えないので今すでに持つてる材料でそのまま進めていくしかない、そうなるとうどんどんいろんな考えが湧き出てきて手が追い付かないぐらいになったりする。

天然で真理が分かるとは

という話は別にどうでもいいのだが、なぜこの話になったのかと言うと、さっきベッドで目を閉じてボーっとしていると浮かんできたことがあって、というかそれすらも、今そのことについて書こうと思ったから結果としてそんなことを自分は考えていたのだ、と気づいただけなのだが、ともかくそんな感じで外圧を取り除くと勝手に考えは始まるもので、

その時に考えていたのが、僕が個人的に好きだったり気になったりする人の一部にある傾向があって、それを何と言っているのか分からないが、「宇宙人タイプ」とでも言うでしょう。

その宇宙人タイプがどういうものかと言語化するのはむずいんですが、ざっくり言うと「天然で真理に気づいている人、でもその背後ではちゃんと計算がある人」。その人がなんとなくで選んだやり方や振る舞いがど真ん中の核心的な部分にドンピシャで行く人、ポイントを外さない、でもそれは本当になんとかなくのではなく、その人なりの考えや計算がある人。

だからこれは両方言えて、ちゃんとめちやくちや考えてやってるけどたまたま合うように見えている、というのと、でも一方で実際に天然でそこにたどり着いてる部分もある感じ。

かなりややこしいが、もう少し言えば、「これが当たり前でしょ」という感じでやってることがこっから見て芯を外してなくて、でもその裏で緻密に考えて出した答えでもあるというか。

で、そういう人が知り合いにもいたりしてその他著名人にも「この人もそっち系か」とか勝手に思ったりするのだが、眉村ちあきというシンガーソングライターは個人的にそういう風を感じていて、むしろそれがすごくその人で気になっている部分。

あと恐らくわかりやすいのは、日ハムの監督の新庄剛志。新庄と言えばオールスターでホームスチールをした話が有名で、他にもユニフォームに七色に光るベルトをつけたり、開幕戦で天井から降りてきたり、メジャーに行ったときはメジャーリーガーに日本語を教えて回ったりと、派手なエピソードが多い。

このホームスチールも確か「ジャンクスポーツ」という番組で話してたと思うが、「その時のキャッチャーだった阪神矢野は、ピッチャーに返球するときに三塁ランナーを二回見る癖があるから、二回見て目線がピッチャーの方に戻ったときがスタートのタイミングとしてベストで、さらにそのピッチャーは焦って投げると高めに抜ける癖があるから全部ひっくるめると成功確率はかなり高かった」とのこと。

もう一つ有名なのは、本来意図してボールゾーンに投げるはずの敬遠球を見事に打ち返してサヨナラ勝ちした試合があるが、その前日には敬遠球を打つ練習をしていて、「チャンスがあれば打ってもいいですか」とコーチから監督に伝言して許可を得ていた。そういう極めて具体的な思考が数多くある。

ドリームと具体領域の処理能力

これは自己啓発ニュアンスで言えば夢を実現しようと思う時の思考に似ていて、夢とか目標とかゴールと言うと将来の抽象的なものと考えてしまいがちだが、夢も目標もゴールもこの三次元の世界で実際に体験するものなのだから、明らかに具体的なものでだから本当は一番具体的に考える必要がある。

でも「大きな夢を」などと言われるせいで、とりあえず世界一周、豪邸、一億円と考えてしまう。もちろん最初がいいが、でもその階層のレベルだと最後に現実とつながるところまでは大きく開きがあって、だから夢を夢としたままその平衡状態のまま時間が流れていく。

そこから現実と接続しようとして粘っていくことこそが「考える」ということで、しかも本当に面白いのはその時間。その妄想をどうやって今の自分の環境と手札と能力とで実現させていくか、近づいていくか。となるとこれはもう具体的な事物をどう扱うかという問題で、そこがまさにこの「ホームスチールに至るまでの思考」と同じと言える。

オールスターでホームスチールしたら面白いかな、という夢(妄想)があったとして、それを実現しようと思うと、「キャッチャーはこの人で、ピッチャーはこういう癖があって、じゃあどういう場面かという瞬間なら一番可能性が高いのか」と考えていくことになる、そういう頭の使い方はめっちゃおもしろい。

話がそれだが、何の話だったかと言うと、別に何の話でもなくて、だから「壮大な思い付きと、それを現実と接続する具体領域での処理能力」みたいな言い方ができるのかもしれない。

例えば、知り合いという距離間でもないが一度話をしたことがある人でそっちタイプだと感じた人がいて、彼はファミマのイートインで横にいた女性が気になり、どうすれば会話が始まるだろうかと考えた結果、その人がトイレで立ち上がって一瞬いなくなったタイミングで椅子を自分の方に近づけておいて、細かいことは忘れたが戻ってきたときに「あーこの椅子どうぞ使ってください」みたいなところから会話を始めたと言っていた。

今こうやって考えていくと2つ要素としてありそうなのは、一瞬無理そうに思える夢(と言っても、「こんなこと出来たら面白そう」という、そんな簡単にあっさりできるわけではないぐらいの欲望)を

思い描ける想像力、夢見れる力、『放送室』という松本人志と放送作家の高須光聖のラジオで高須光聖が「ドリーム視力」って言ってたのだが、そういう類の概念。

これと、それを現実に落とし込む力。手段を具体的に考えていく際に、通常は現実的な手法で考えてしまうが、例えば、「いくらいくらのお金がまず必要かあ」とか「場所があれば」「時間があれば」「英語がペラペラだったら」「こんだけの土地があれば」とか。

でもそれは常識の範囲で何となくみんながそういうやり方をしてるからそこからしか選べないと思っただけで、実際には「絶対にその野望を実現したい」という気持ちさえあれば、もっといいやり方は見つかる。

というのは、お金が時間が英語が～とかは抽象的で、それは超ウルトラ具体的な目的がない時に、対応できる範囲を広げるためのツールであって、たった一つその一点だけを満たす手にする到達すると考えるときには、もっと適したやり方や道具はこの世界には溢れていて、それを探しに行く。というかそれぐらいに訳の分からないところからでもアイデアが浮かび、見つけてきてしまうもの。

それを人は型破りなやり方などと表現するが、それは型破りでも何でもなく、本人の環境や状況や思考の癖や人間関係などを踏まえて、その目的に最も適当な手段だったということではない。

理論と瞬間の徹底的な思考

で、強引にまた話を戻せば、眉村ちあきもそういうタイプだと思っただけで、最近はある曲とか聞けてないが、考え方の部分がかかなり面白くてインタビュー記事を何年前によく漁っていた、もちろん歌もいいけども。

その歌の話で言えば、作りもかなりこだわっているとかめっちゃくちゃ考えられていて、分かりやすいので言えば、真面目な悲しいテーマほどポップな曲調で、アホみたいな内容の時にはめっちゃしっとりしたい歌感のあるメロディーだったりする。

これも「歌って大体こういう感じやろ」じゃなくて、じゃあどうやったら人の耳に記憶に残るのかとか考えたときに、ギャップの作り方として最後にそういう形が選ばれたのだと思うが、他にも僕が勝手に本読んだり考えたりして、理屈として分かってくるような取り組みの姿勢とか方針を天然でやってしまったりする。

でもそれも天然でやってるように見せかけてめっちゃ考えてたりするからわからないところで、いや、今わかったのは、僕の場合よくあるのは、理論として先に勉強してそれをじゃあ今の場合に当てはめるとどうなるだろうか、という考え方が多い。行き過ぎると頭でっかちと言われるやつ。もう一つのタイプは、理論として先に学ぶ部分がなくて、今の状況だけにフォーカスしてその枠内で問題に対処しようとする。

眉村ちあきタイプは、「理論とか別に知らないが、今のその問題をその都度びっくりするぐらいの具体度で徹底的に考えるために、僕が理屈として知ってるような話から大外れはしていない答えを普通に出せてしまう」ということ、これかもしれない。

だから「天然で」というのは、ゼロからいきなり答えをひらめいてしまうというより、今までの経験とその瞬間の徹底的な思考だけで、すでに理屈として知られていたり科学的なアプローチで導きだ

されるであろう答えと同じ方向性のものが出せてしまう、これがこの宇宙人タイプが天然で真理にたどり着いてしまうときの「天然」にあたる。